

大学生版聴くスキル尺度作成の試み¹⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科 藤原 健志

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 濱口 佳和

Construction of listening skills scales for undergraduates

Takeshi Fujiwara (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yoshikazu Hamaguchi (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purposes of this study are (1) to construct two listening skills scales for undergraduates, that have high reliability and validity, and (2) to investigate gender differences and the relationship between the two scales. Using Brownell's HURIER model (2009), six components of listening skills (five cognitive/behavioral) are identified and a cognitive skills scale and a behavioral skills scale for undergraduates are constructed separately. The results of a *t*-test reveal that females receive higher scores than males for both the complete scales and some of their components. Some remaining problems and further possibilities are discussed.

Key words: social skills, listening skills, HURIER model

問題と目的

近年、若者のコミュニケーション能力についての議論が活発になっている。その背景には、企業が新入社員に求める能力として、コミュニケーション・スキルを挙げていることが大きい。様々な統計調査において、程度の差はあるものの、企業が採用に際してコミュニケーション能力を重視していることが明らかになっている（厚生労働省, 2004; 日本経済団体連合会, 2010）。中等・高等教育機関におけるキャリア教育の拡充が求められている今日、就職活動を控えた大学生や高校生にとって、こうした能力を身につけることは非常に重要である。

青年期において、コミュニケーション能力を伸ばす場として最も重要なのが、仲間関係であろう。青

年期において、友人関係は広く浅い関係から深く狭い関係へ移行する（落合・佐藤, 1996）。その中で、互いを尊重する欲求が高まり（榎本, 2000）、相互に理解する活動が増える（榎本, 1999）。また、友人関係において自己表明が増える一方、他者からの表明を望む気持ちも高まる（新見・松尾・前田, 2004; 柴橋, 2001）。こうした仲間関係に対する欲求やそれに伴う活動の中でコミュニケーション能力が洗練され、仲間関係以外へ派生していくと考えられる。それゆえ、青年期の友人関係におけるコミュニケーション能力の獲得が、その他の対人関係領域におけるコミュニケーションや、その後の社会適応において重要であると考えられる。

従来教育心理学や臨床心理学領域では、こうしたコミュニケーション能力について、社会的スキル (Social skills) の観点から研究が行われてきた。社会的スキルの定義や構成要素については多くの議論があるが（例えば、相川, 2000; Gresham, 1986; 堀毛, 1990）、その中でも「人の話を聴く」というスキル

1) 本研究は、2009年度に筑波大学大学院人間総合科学研究科心理専攻へ提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

は、多くの研究者によって構成要素に含められており、標的スキルに聴くスキル (listening skills) を含むソーシャルスキル・トレーニング (social skills training: 以下 SST と略す) も、小中学生を中心に数多く行われている (例えば、後藤・佐藤・佐藤, 2000; 本田・大島・新井, 2009)。

一方、大学生を対象としたコミュニケーション・スキルの研究に関しては、従来より主張スキルの研究が多く行われており、概念整理や尺度作成など、その広がりを見せている (例えば、柴橋, 1998; 渡部, 2006 など)。しかしながら、この「話す」スキルの研究が進展する一方で、コミュニケーションの両翼を成すはずの「聴く」スキルの研究は非常に少ない。これまで、本邦及び海外では大学生を対象とした聴くスキル尺度がいくつか作成されている (久木山, 2006; Watson, Baker & Weaver, 1995)。しかしながら、これらの尺度は構成要素の設定において理論的根拠に乏しい。また、両尺度とも一部下位尺度において α 係数が低く、信頼性に疑問が残る。更に、妥当性の検討に関しても、久木山 (2006) の尺度は KiSS-18 (菊池, 1988) との正の相関を有することが確認されているが、Watson et al. (1995) の尺度は類縁概念との関連が検討されていない。以上の問題から、聴くスキルを研究する際には、構成概念を十分検討し、信頼性と妥当性を備えた尺度を開発することが課題である。そこで本研究では、藤原・濱口 (2010a) の高校生版聴くスキル尺度を参考に、友人の話を聴くスキルを測定する、大学生版の尺度を作成する²⁾。

藤原・濱口 (2010a) の聴くスキル尺度は、Brownell (1985, 2009) の HURIER モデルを基盤に、友人の話を聴くスキルを測定する尺度として作成されている。Brownell (1985, 2009) の HURIER モデルとは、聴くことを、以下の6つの構成要素が形成するプロセスとしてとらえたモデルである (Figure 1)。“HURIER”とは、聴きとり (Hearing: 相手の話に集中して耳を傾けること)、理解 (Understanding: 話された内容を理解すること)、記憶の保持 (Remembering: 聴いた内容を覚えておくこと)、解釈 (Interpreting: 相手の非言語的なメッセージを解釈し、相手の考えや感情に共感すること)、評価 (Evaluating: 相手の意見にすぐと同調あるいは非難することなく、最後まで話を聴いてから判断すること)、反応 (Responding: 聴いて

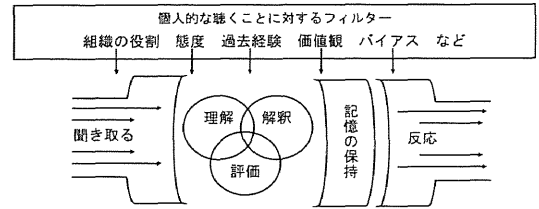


Figure 1 Brownell (1985, 2009) の HURIER モデル

いることを言語的・非言語的に相手に反応として示すこと) の頭文字をとったものである。

藤原・濱口 (2010a) では、これら構成要素とプロセスとしての聴き方を踏襲し、聴くスキルを「相手に注意を向け、話の内容を正確に理解・記憶し、共感的に聴き、聴いていることを反応として相手に示す、一連のプロセスを踏まえた話の聴き方」と定義した。また聴くスキルの認知面と行動面双方を考慮する必要があるという先行研究の指摘 (Rhodes, Watson & Baker, 1990) から、聴くスキルの認知面・行動面はそれぞれ別々に尺度化されている。認知面に関しては「会話への集中」、「共感」、「記憶の保持」、「理解」の4因子、行動面については「相手への応答」、「手をとめて聴く」、「話を遮らない」、「寄りかからない」、「前傾」の5因子がそれぞれ見出され、一定の信頼性と妥当性を有することが確認されている。また、この尺度に基づき、聴くスキルが対人動機ならびに学校生活満足感と有意な関連を示すことも明らかにされている (藤原・濱口, 2010b)。

以上より、本研究の目的は、藤原・濱口 (2010a) を基に友人関係における聴くスキルを測定する質問紙尺度を開発し、尺度の基礎的情報を得ることである。

方 法

1. 調査対象者 関東地方の国立大学に通う大学1～4年生315名(男子168名,女子147名)であった。
2. 調査時期 2009年5月から7月であった。
3. 調査方法 大学の講義時間の一部を利用し、第一著者が以下の教示と配布を行い、調査対象者に回答を求めた。
4. 質問紙構成と内容 A4版用紙6枚で構成された。フェイスシートには、日常生活の事柄について尋ねる旨を示し、調査は講義の成績とは無関係であること、倫理的配慮(回答の中止や拒否の権利について)を記載し、学年、性別の回答欄を設けた。2ページ以降は、以下の尺度をその順番で用いた。
 - a. 聴く認知スキル尺度 聴くスキルの認知的側面

2) なお、藤原・濱口 (2010a) では詳述されていないが、藤原・濱口 (2010a) の尺度も、友人の話を聴くスキルについて測定している。

を測定するため、HURIERモデルの構成要素のうち、「聴き取り」、「理解」、「記憶の保持」、「解釈」、「評価」の5つの領域について、心理学を専門とする大学教員1名と大学院生1名が協議し、それぞれ5項目ずつ、計25項目から成る元尺度を作成した (Table 1参照)。それぞれの項目について、「まったくあてはまらない (1)」、「あてはまらない (2)」、「どちらともいえない (3)」、「あてはまる (4)」、「よくあてはまる (5)」の5件法で回答を求めた。

b. 聴く行動スキル尺度 Brownell (1985, 2009) では行動の諸要素について、その内容が詳細に論じられていなかった。そのため行動スキル尺度に関しては、項目作成のための予備調査として、2009年1月から3月にかけて、関東地方の公立中学校、国立高校、および国立大学に通う中学生から大学生349名 (男子167名、女子182名) を対象とした質問紙による自由記述調査を行った。得られた記述を分類

し、各学校段階に共通して存在した①うなずき・あいづち、②意見、③話を遮らない、④話の整理・質問、⑤表情、⑥視線、⑦それまで行っていた作業の中断、⑧姿勢、の8つの領域について、心理学を専門とする大学教員1名と大学院生1名が協議し、それぞれ4項目ずつ、計32項目を作成した (Table 2参照)。各項目について、「まったくしない (1)」、「あまりしない (2)」、「たまにする (3)」、「よくする (4)」の4件法で回答を求めた。

c. 共感性尺度 登張 (2003) の共感性尺度を用いた。本研究では、4下位尺度のうち「共感的関心」(「困っている人がいたら助けたい」など) と「気持ちの想像」(「誰かを批判するより前に、自分がその人だったらどう思うか想像する」など) の2つの下位因子から因子負荷量の高い順に5項目ずつ、計10項目(5件法)を用いた。

d. 社会的自己制御尺度 原田・吉澤・吉田 (2008)

Table 1 聴く認知スキル尺度の元尺度の項目と記述統計

	平均値	SD
聴き取り		
1: 周囲が多少騒がしくても、友達の話に集中できる	3.78	(0.90)
6: 友達の話をしているときには、その話に夢中になることが多い	3.25	(0.84)
11: 友達の話をしているとき、気が散りやすい R	3.35	(0.95)
16: 興味のある話題でも、友達の話長く聞いていることができない R	4.03	(0.85)
21: 友達の話が長くても、飽きずに聞いている	3.32	(0.86)
理解		
2: 友達の話をよく勘違いしていることがある R	3.08	(0.95)
7: 話の要点をまとめながら友達の話聞く	2.93	(0.96)
12: 会話の中で友達が最も伝えたいことを理解するのは、自分にとって難しいことではない	3.27	(0.88)
17: 友達の話が長くても、話の要点をきちんと把握できる	3.31	(0.79)
22: 友達から早とちりだと言われることがある R	3.49	(1.06)
記憶の保持		
3: 友達が一方的に話を続けていても、話の内容をよく覚えている	3.42	(0.92)
8: 前に聞いたことのある話を忘れてしまい、『そんな話初めて聞いた』と思うことがある R	3.32	(1.18)
13: 友達の話が長いと、最初の方に話していたことを忘れてしまうことが多い R	3.29	(1.01)
18: 友達の話が長くなっても、話の細かい内容まで割とよく覚えている	3.14	(0.91)
23: 友達の話聞いて気になったことは、あとで思い出せる	3.65	(0.82)
解釈		
4: 友達の声の調子から、友達の気持ちがわかる	3.71	(0.85)
9: 友達がはっきり言わないことでも、友達の雰囲気、どんなことを伝えたいのか、だいたい分かる	3.57	(0.90)
14: 友達の立場に立って、友達がどんな気持ちなのかを考える	3.52	(0.83)
19: 話をしている友達の表情を見れば、友達がどんな気持ちなのか分かる	3.50	(0.84)
24: 友達の視点に立って、友達が考えていることを予想する	3.56	(0.84)
評価		
5: 友達に賛成できるかどうかを、友達の話聞き終わる前に判断する R	2.95	(0.97)
10: 友達が他の人の悪口を言っている時は、友達の話客観的に聞く	3.58	(0.90)
15: 自分と友達のどちらの意見が正しいのか、すぐには判断しない	3.40	(0.92)
20: 友達の意見が自分の意見と違うことに気づいても、まずは話を最後まで聞いてみる	3.80	(0.83)
25: 話を聞いているときには、客観的になるように気を配る	3.31	(0.93)

※ R は逆転項目を示す

Table 2 聴く行動スキル尺度の元尺度の項目と記述統計

	平均値	SD
うなずき・あいづち		
1: 友達の話を聞きながら、「そうなんだ」、「本当に!？」などの短い言葉をかける	3.54	(0.60)
9: 友達の話を聞いているとき、うなづくことが多い	3.29	(0.73)
17: 友達の話を聞きながら、「うんうん」、「へえー」などのあいづちを打つ	3.51	(0.65)
25: 友達の話に合わせて、うなずいたり首をかしげたりする	3.31	(0.67)
意見		
2: 話を聞いていて感じたことや考えたことがあっても、友達には言わない R	2.60	(0.77)
10: ただ聞いているだけではなく、時と場合に応じて感想や意見を友達に言う	3.19	(0.70)
18: 友達が一通り話し終えたら、自分の思ったことや感じたことを友達に伝える	3.11	(0.68)
26: 話を聞いているだけではなく、時には思ったことや感じたことを友達に伝える	3.11	(0.67)
話を遮らない		
3: 友達の話を妨げないよう、相手が話しているときは黙っている	2.67	(0.80)
11: 友達が話している最中によく口をはさむ R	2.50	(0.79)
19: 友達が話しているときには、話の腰を折らない	2.91	(0.79)
27: 友達が話していても、友達の話をさえぎって話し始めることがある R	2.78	(0.77)
整理・質問		
4: 話がまとまらなくなったときには、話の内容をまとめて、相手に確認する	2.70	(0.84)
12: 友達の話で、もっと知りたいと感じたことは質問する	3.23	(0.71)
20: 話が長くなると、「それってこういうこと？」と相手に確認する	2.87	(0.76)
28: 話を聞いていて、わからなかったところは友達に質問する	3.04	(0.64)
表情		
5: 人の話を聞いているときには、表情をほとんど変えない R	3.08	(0.75)
13: 真剣な話を聞いていたのにふざけて笑ってしまうことがある R	2.88	(0.84)
21: 友達の話を聞いていて、相手が笑うと自分も自然と笑顔になる	3.42	(0.66)
29: 友達が真剣な話をしているときは、自分も自然と引き締まった表情になる	3.19	(0.71)
作業の中断		
6: 何か別のことをしながら友達の話を聞くことが多い R	2.68	(0.72)
14: 何か作業をしていても、友達が話しかけてきたらそれをやめる	2.71	(0.74)
22: 友達が話しかけてきても、自分がそれまでやってきたことを続ける R	2.64	(0.71)
30: 友達が話しかけてきたら、自分がやっていたことをやめて話を聞く	2.79	(0.74)
視線		
7: 友達が話しかけてきたときには、相手の顔を見ながら話を聞く	3.26	(0.78)
15: 友達の話を聞くときには、相手のほうを向く	3.30	(0.69)
23: 友達の話を聞くときには、話している相手のほうを向く	3.24	(0.70)
31: 友達の話を聞くときには、友達の目を見るようにしている	3.08	(0.79)
姿勢		
8: 友達の話を聞いているときには、よく壁や椅子に寄りかかる R	2.45	(0.75)
16: 友達の話を聞いているときは、からだの前めりになる	2.29	(0.78)
24: 友達の話を聞いているときは、相手のほうに身を乗り出す	2.32	(0.77)
32: 友達の話を、後ろに寄りかかりながら聞くことが多い R	2.71	(0.73)

※ R は逆転項目を示す

※イタリック体は天井効果（平均と標準偏差の和が4以上）が表れた項目を示す

の社会的自己制御尺度を用いた。本研究では、3下位尺度のうち、「持続的対処・根気」（「やりとおさねばならない仕事があるときは、どんな誘惑があっても最後までやりとおすことができる」など）と「感情・欲求抑制」（「いやなことがあっても、人やものに八つ当たりをしない」など）の2下位因子から、因子負荷量の高い順に5項目ずつ、計10項目（5

件法）を用いた。

e. **社会的スキル尺度** 菊池（1988）の社会的スキル尺度（KiSS-18：18項目5件法）を用いた。

f. **性格検査** 村上・村上（1997）の主要5因子性格検査の下位因子「知性」から、因子負荷量の高い順に6項目を採用し、「はい（1）」、「いいえ（0）」の2件法で用いた。

5. 研究倫理について 本研究は、著者の所属する大学院研究科内の研究倫理委員会の承認を得て行われた。

分布の偏った項目は見られなかった。

結果

1. 聴くスキル尺度の記述統計

聴くスキル元尺度の各項目について平均値と標準偏差を算出した。その結果、天井効果（平均値 + 標準偏差の値が4以上）が認められた聴く行動スキル尺度の5項目は、以後の分析に含めなかった（項目はTable 2参照）。聴く認知スキル尺度については、

2. 聴く認知スキル尺度の結果

聴く認知スキル(以下 cognitive aspects in listening skills (CALS) と略す) 25 項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子抽出基準を固有値1以上とした結果、7因子が抽出された。因子負荷量が.35に満たない項目や複数の因子に対して高い負荷量を示した項目を削除して再度因子分析を行った結果、Table 3に示す因子パターン行列を得た。

第1因子（「話をしている友達の表情を見れば、

Table 3 聴く認知スキル尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	<i>h</i> ²
F1 共感 ($\alpha = .78$)								
19:話をしている友達の表情を見れば、友達がどんな気持ちなのか分かる(解釈)	.83	.04	-.07	-.06	-.14	-.04	.16	.66
4:友達の声の調子から、友達の気持ちがわかる(解釈)	.75	.02	-.09	-.03	.00	.07	.12	.58
9:友達ははっきり言わないことでも、友達の雰囲気、どんなことを伝えたいのか、だいたい分かる(解釈)	.68	-.02	-.05	-.06	.11	.01	.02	.46
12:会話の中で友達が最も伝えたいことを理解するのは、自分にとって難しいことではない(理解)	.46	.05	.21	.18	.03	-.17	-.14	.51
F2 記憶の保持 ($\alpha = .73$)								
18:友達の話が長くなっても、話の細かい内容まで割とよく覚えている(記憶の保持)	-.01	.84	-.15	-.01	.09	.02	-.06	.62
3:友達が一方的に話を続けていても、話の内容をよく覚えている(記憶の保持)	-.08	.58	-.13	.17	.04	.10	-.08	.38
13:友達の話が長いと、最初の方に話していたことを忘れてしまうことが多い(記憶の保持:R)	.10	.53	.20	-.12	-.13	.08	-.02	.40
17:友達の話が長くても、話の要点をきちんと把握できる(理解)	.10	.53	.30	-.06	.01	-.07	.04	.55
23:友達の話を聞いて気になったことは、あとで思い出せる(記憶の保持)	.02	.42	.04	-.04	-.12	.02	.19	.22
F3 理解 ($\alpha = .64$)								
22:友達から早とちりだと言われることがある(理解:R)	-.20	.01	.82	-.10	.04	.09	.07	.56
2:友達の話をよく勘違いしていることがある(理解:R)	.04	-.06	.66	.11	.05	-.11	-.02	.48
F4 会話への集中 ($\alpha = .61$)								
6:友達の話を聞いているときには、その話に夢中になることが多い(聴き取り)	-.12	-.07	-.05	.64	-.04	-.17	.19	.31
1:周囲が少しくらい騒がしくても、友達の話に集中できる(聴き取り)	.22	.00	-.04	.45	.03	.19	-.11	.41
21:友達の話が長くても、飽きずに聞いていられる(聴き取り)	-.08	.11	.04	.45	.00	.10	.10	.32
11:友達の話を聞いているとき、気が散りやすい(聴き取り:R)	.07	.09	.19	.39	-.07	.04	-.07	.36
F5 客観性の維持 ($\alpha = .56$)								
10:友達が他の人の悪口を言っている時は、友達の話を客観的に聞く(評価)	.14	-.21	.10	-.15	.63	.10	-.06	.45
25:話を聞いているときには、客観的になるように気を配る(評価)	-.22	.06	.06	.11	.56	.08	.16	.41
7:話の要点をまとめながら友達の話を聞く(理解)	.08	.26	-.10	-.03	.48	-.23	.04	.39
F6 判断の遅延 ($\alpha = .48$)								
15:自分と友達のどちらの意見が正しいのか、すぐには判断しない(評価)	.11	.08	.00	-.10	.01	.65	-.02	.43
20:友達の意見が自分の意見と違うことに気づいても、まずは話を最後まで聞いてみる(評価)	.13	-.03	.03	-.03	.09	.45	.09	.30
5:友達に賛成できるかどうかを、友達の話を聞き終わる前に判断する(評価:R)	-.24	.08	-.02	.05	-.02	.44	.01	.21
F7 他者視点の考慮 ($\alpha = .69$)								
24:友達の視点に立って、友達が考えていることを予想する(解釈)	.14	.01	.01	.10	.09	-.03	.64	.59
14:友達の立場に立って、友達がどんな気持ちなのかを考える(解釈)	.19	-.06	.05	.13	.01	.10	.55	.51

※ () 内は当初想定した5つの領域を示す Rは逆転項目を示す
F6を除いた尺度全体の $\alpha = .85$ 累積寄与率:43.83%

	F2	F3	F4	F5	F6	F7
F1	.54	.52	.48	.35	.18	.30
F2		.47	.56	.18	.04	.11
F3			.47	.21	.29	.07
F4				.28	.27	.16
F5					.13	.28
F6						.23

友達がどんな気持ちなのか分かる」など4項目)は、当初「解釈」に負荷すると想定した項目から構成されたが、「気持ちがわかる」などの項目内容から「共感」と命名された。第2因子(「友達の話が長くなっても、話の細かい内容まで割とよく覚えている」など5項目)は、当初「記憶の保持」に負荷すると想定していた項目を中心に構成され、「記憶の保持」と命名された。第3因子(「友達から早とちりだといわれることがある(逆転項目)」など2項目)は、当初「理解」に負荷すると想定していた項目から構成されており、「理解」と命名された。第4因子(「友達の話を聞いているときには、その話の中に夢中になることが多い」など4項目)は、当初「聴き取り」に負荷すると想定していた項目から構成されているが、「集中できる」や「飽きずに聴いていられる」などの項目内容を因子名に反映させるため、「会話への集中」と命名された。第5因子(「友達が他の人の悪口を言っている時は、友達の話を客観的に聞く」など3項目)は、当初「評価」に負荷すると想定していた項目を中心として構成されたが、複数の項目に「客観的に」という内容が含まれるため、「客観性の維持」と命名された。第6因子(「自分と友達のどちらの意見が正しいのか、すぐには判断しない」など3項目)は、こちらも当初「評価」に負荷すると想定していた項目から構成されたが、項目に「すぐに判断をしない」や「最後まで話を聴く」などの内容が含まれたことから、「判断の遅延」と命名された。第7因子(「友達の視点に立って、友達が考えていることを予想する」など2項目)は、当初「解釈」に負荷すると想定していた項目の一部、特に「友達の立場や視点に立って」という内容が含まれることから、「他者視点の考慮」と命名された。

3. 聴く行動スキル尺度の結果

聴く行動スキル(以下 behavioral aspects in listening skills (BALS) と略す)を測定する32項目から天井効果が現れた5項目を削除した27項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子抽出基準を固有値1以上とした結果、6因子が抽出された。CALS尺度と同様の手続きにより、最終的にTable 4に示す因子パターンが得られた。

第1因子(「話を聞いているだけでなく、時には思ったことや感じたことを友達に伝える」など6項目)は、「意見」と「質問・確認」の領域の項目から構成された。どちらも相手への応答を示す項目という面で共通しているため、第1因子は「相手への応答」と命名された。第2因子(「友達の話を聞

くときには、相手のほうを向く」など3項目)は、当初「視線」と想定していた項目群から構成されたが、因子名に「相手の方を向く」という意味合いを反映するため、「定位」と命名された。第3因子(「友達が話している最中によく口をはさむ(逆転項目)」など4項目)は、「話を遮らない」の領域の項目群から成り、「話を遮らない」と命名された。第4因子(「何か作業をしていますが、友達が話しかけてきたらそれをやめる」など3項目)は、当初「作業の中断」と想定していた項目群から構成されたが、それまで行っていた作業を自発的に中止して話を聴くという項目内容の意味合いを因子名に反映させるため、「手をとめて聴く」と命名された。第5因子(「友達の話を聞いているときには、からだの前めりになる」など2項目)と第6因子(「友達の話を聞いている時には、よく壁や椅子に寄りかかる」など2項目)は「姿勢」の項目によって構成されたが、2つの因子に分離したため、「寄りかかる」ことに対する逆転項目で構成された第5因子は「寄りかからない」、姿勢の中でも状態を前方に傾ける内容で構成された第6因子は「前傾」と命名された。

4. 聴くスキル尺度の信頼性・妥当性の検討

a. CALS 尺度

CALS 尺度について、尺度の信頼性を検討するため、尺度全体と各下位尺度について α 係数を算出した。その結果、尺度全体の $\alpha = .85$ 、各下位尺度の α は $.78 \sim .48$ であった(数値はTable 3に記載)。「判断の遅延」の α が $.50$ を切ったため、これ以下では「判断の遅延」を尺度から除外し、6因子20項目のCALS 尺度として分析を進めた。尺度全体及びそれ以外の下位尺度においては α が $.50$ を上回り、おおむね十分な値が示された。

また、尺度の基準関連妥当性を検討するため、全般的社会的スキル、共感性、社会的自己制御、知性との相関係数を算出した(Table 5)。その結果、CALS と共感性や社会的自己制御、全般的な社会的スキルとの間に有意な正の相関が見られた。一方知的な高さとの関連においては、尺度全体と一部の下位尺度において有意な正の関連が明らかとなったが、全般的に相関係数の値は低かった。

b. BALS 尺度

CALS 尺度同様、BALS 尺度についても尺度全体と各下位尺度について α 係数を算出した。その結果、尺度全体の $\alpha = .79$ 、各下位尺度の α は $.87 \sim .75$ であり、尺度全体及び下位尺度において十分な値が示された(数値はTable 4に記載)。また、尺度の基準関連妥当性を検討するため、各変数との相関係数

Table 4 聴く行動スキル尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h^2
F1 相手への応答 ($\alpha = .80$)							
26 : 話を聞いているだけではなく、時には思ったことや感じたことを友達に伝える (意見)	.78	-.01	-.03	.03	-.02	.01	.61
18 : 友達が一通り話し終えたら、自分の思ったことや感じたことを友達に伝える (意見)	.64	.01	.02	.11	.01	.00	.46
10 : ただ聞いているだけではなく、時と場合に応じて感想や意見を友達に言う (意見)	.63	.00	-.13	.03	.04	.05	.47
20 : 話が長くなると、「それってこういうこと?」と相手に確認する (整理・質問)	.62	.03	.08	-.15	.00	.06	.36
12 : 友達の話で、もっと知りたいと感じたことは質問する (整理・質問)	.59	.07	-.08	.05	-.05	-.12	.43
4 : 話がまとまらなくなったときには、話の内容をまとめて、相手に確認する (整理・質問)	.53	-.05	.18	-.15	.03	.02	.24
F2 定位 ($\alpha = .85$)							
15 : 友達の話を聞くときには、相手のほうを向く (視線)	-.07	.93	-.08	.06	.01	.02	.88
23 : 友達の話を聞くときには、話している相手のほうを向く (視線)	.04	.78	.03	.02	-.01	.06	.67
31 : 友達の話を聞くときには、友達の目を見るようにしている (視線)	.06	.71	.06	-.07	.02	-.08	.50
F3 話を遮らない ($\alpha = .75$)							
11 : 友達が話している最中によく口をはさむ (話を遮らない: R)	-.11	.03	.84	-.04	-.02	-.03	.74
27 : 友達が話しているとき、友達の話をさえぎって話し始めることがある (話を遮らない: R)	-.02	.05	.70	-.01	-.02	.11	.53
19 : 友達が話しているときには、話の腰を折らない (話を遮らない)	.21	-.02	.63	.11	-.01	-.02	.43
3 : 友達の話を妨げないよう、相手が話しているときは黙っている (話を遮らない)	.01	-.06	.45	.10	.06	-.10	.24
F4 手をとめて聴く ($\alpha = .81$)							
14 : 何か作業をしながら、友達が話しかけてきたらそれをやめる (作業の中断)	-.04	-.05	.02	.86	-.01	-.01	.70
30 : 友達が話しかけてきたら、自分がやっていたことをやめて話を聞く (作業の中断)	.06	.03	.05	.77	-.01	-.01	.65
22 : 友達が話しかけてきても、自分がそれまでやってきたことを続ける (作業の中断: R)	-.11	.03	.06	.63	.01	.05	.45
F5 前傾 ($\alpha = .87$)							
16 : 友達の話を聞いているときは、からだの前めりになる (姿勢)	.01	-.06	.02	.04	.93	.02	.87
24 : 友達の話を聞いているときは、相手のほうに身を乗り出す (姿勢)	-.01	.08	-.01	-.04	.82	-.03	.70
F6 寄りかからない ($\alpha = .76$)							
8 : 友達の話を聞いているときには、よく壁や椅子に寄りかかる (姿勢: R)	.01	-.03	-.04	.04	.01	.89	.79
32 : 友達の話を、後ろに寄りかかきながら聞くことが多い (姿勢: R)	.02	.01	.00	-.01	-.02	.69	.48

※ () 内は当初想定した8つの領域を示す Rは逆転項目を示す
尺度全体の $\alpha = .79$ 累積寄与率: 56.06%

因子間相関					
	F2	F3	F4	F5	F6
F1	.37	-.23	.20	.19	.01
F2		.15	.48	.33	.22
F3			.31	.11	.13
F4				.20	.22
F5					.09

を算出した (Table 5)。その結果、BALS 全体では共感性の2下位尺度、社会的自己制御尺度の「持続的対処と根気」、KiSS-18と有意な正の相関が得られた。一方、社会的自己制御尺度の「感情と欲求抑制」と知性とは有意な相関は得られなかった。

4. 聴くスキル尺度の性差の検討

聴くスキル尺度の性差を検討するために、CALS 尺度とBALS 尺度について、尺度全体の平均点と下位尺度ごとの平均点を用いた t 検定を行った (Table 6)。その結果、CALS 尺度では、尺度全体 ($t(313) = 2.33, p < .05$) と共感 ($t(313) = 2.62, p < .01$)、他者視点の考慮 ($t(313.99) = 3.23, p < .01$) において有意な性差が確認され、いずれも女子の得点の方が高かった。また、BALS 尺度においては、尺度全体 ($t(285.25) = 3.89, p < .01$) と相手への応答 ($t(313)$

$= 5.85, p < .01$)、定位 ($t(313) = 2.94, p < .01$) において有意な性差が確認され、いずれも女子の得点が男子の得点よりも高かった。

5. CALS 尺度とBALS 尺度の関連の検討

聴くスキル間の関連を検討するため、CALS 尺度とBALS 尺度の相関係数を算出した (Table 7)。その結果、CALS 尺度全体では、BALS 尺度全体と「寄りかからない」以外の全てのBALS 下位尺度と有意な正の相関が得られた ($r = .47 \sim .15$, いずれも $p < .01$)。またBALS 尺度全体では、CALS 尺度全体ならびにCALC 下位尺度と有意な正の相関が得られた ($r = .47 \sim .28$, いずれも $p < .01$)。また、下位尺度では特にCALCの「会話への集中」がBALSの全ての下位尺度 ($r = .31 \sim .14$, 「寄りかからない」との相関 ($r = .14$) は $p < .05$, それ以外は $p < .01$)

Table 5 聴くスキル尺度と他尺度との相関係数

		共感性尺度		社会的自己制御尺度		KiSS-18	知性
		共感的関心	気持ちの想像	持続的対処 と根気	感情と 欲求抑制		
	共感	.34 **	.48 **	.43 **	.22 **	.55 **	.25 **
	記憶の保持	.16 **	.35 **	.38 **	.07	.40 **	.16 **
	理解	.06	.26 **	.28 **	.20 **	.25 **	.10
聴く	会話への集中	.26 **	.32 **	.40 **	.14 *	.43 **	.11
	客観性の維持	.04	.44 **	.26 **	.21 **	.30 **	.17 **
	他者視点の考慮	.37 **	.59 **	.31 **	.18 **	.34 **	.19 **
スキル	行動スキル尺度 全体	.32 **	.41 **	.32 **	.04	.31 **	.02
	相手への応答	.19 **	.27 **	.11	.01	.26 **	.15 **
	定位	.37 **	.27 **	.26 **	-.05	.32 **	.06
尺度	話を遮らない	.06	.21 **	.19 **	.08	.04	-.18 **
	手をとめて聴く	.22 **	.30 **	.22 **	.10	.12 *	-.05
	前傾	.06	.14 *	.07	-.07	.10	.02
	寄りかからない	.10	.10	.25 **	.07	.14 *	.01

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 6 聴くスキル尺度の平均値とSD, 男女差のt検定の結果

	男子		女子		男女差の検定		
	平均値	SD	平均値	SD	t 値	大小比較	
聴く認知スキル(全体)	3.34	(0.45)	3.46	(0.45)	$t(313) = 2.33 *$	女子>男子	
	共感	3.42	(0.65)	3.61	(0.69)	$t(313) = 2.62 **$	女子>男子
	理解	3.26	(0.84)	3.29	(0.88)	$t(313) = 0.34$	
	会話への集中	3.40	(0.60)	3.45	(0.62)	$t(313) = 0.74$	
	客観性の維持	3.28	(0.68)	3.26	(0.68)	$t(313) = 0.22$	
	他者視点の考慮	3.40	(0.77)	3.69	(0.67)	$t(313.99) = 3.23 **$	女子>男子
聴く行動スキル(全体)	2.76	(0.29)	2.90	(0.35)	$t(285.25) = 3.89 **$	女子>男子	
	相手への応答	2.89	(0.47)	3.21	(0.50)	$t(313) = 5.85 **$	女子>男子
	定位	3.10	(0.62)	3.31	(0.64)	$t(313) = 2.94 **$	女子>男子
	話を遮らない	2.73	(0.57)	2.69	(0.62)	$t(313) = 0.53$	
	手をとめて聴く	2.70	(0.60)	2.72	(0.65)	$t(313) = 0.33$	
	前傾	2.22	(0.73)	2.38	(0.71)	$t(313) = 1.85 †$	(女子>男子)
	寄りかからない	2.55	(0.69)	2.61	(0.64)	$t(313) = 0.73$	

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 7 聴くスキル尺度間の相関係数

	行動スキル 尺度全体	行動スキル 下位尺度					寄りかから ない
		相手への 応答	定位	話を 遮らない	手をとめて 聴く	前傾	
認知スキル尺度全体	.47 **	.34 **	.35 **	.23 **	.25 **	.15 **	.11
共感	.34 **	.30 **	.34 **	.10	.10	.14 *	.07
記憶の保持	.30 **	.26 **	.23 **	.10	.15 **	.09	.07
理解	.28 **	.13 **	.13 *	.27 **	.22 **	.03	.09
会話への集中	.39 **	.16 **	.31 **	.23 **	.29 **	.18 **	.14 *
客観性の維持	.22 **	.22 **	.08	.15 **	.14 *	.03	.00
他者視点の考慮	.34 **	.30 **	.31 **	.11 *	.10	.12 *	.07

** $p < .01$, * $p < .05$

と、BALSの「相手への応答」がCALSの全ての下位尺度($r = .30 \sim .13$, いずれも $p < .01$)と有意な正の相関を有していた。

考 察

本研究の目的は、聴くスキルを測定する質問紙尺度を開発し、その基礎的資料を得ることであった。考察では、本研究において作成された2つの聴くスキル尺度と両尺度の関連ならびに性差について考察する。

1. 聴くスキル尺度の構成について

a. 聴く認知スキル尺度について

本研究で作成された聴く認知スキル尺度は、当初想定したBrownell(1985, 2009)の5つの構成要素を網羅した尺度となった。このうち、当初「解釈」と「評価」を想定して作成した項目が、それぞれ「共感」と「他者視点の考慮」、「客観性の維持」と「判断の遅延」の2下位因子に分かれた。このうち前者2つは、共感性の認知的視点と情緒的視点により分離したと考えられる。共感性研究では、従来より共感性が認知的共感性と情緒的共感性に大別されることが指摘されている(出口・斉藤, 1991; 登張, 2003など)。このことから、本研究の結果もこの共感性の2つの側面を反映したものであると考えられる。一方後者2つは、項目作成の段階で「客観性」や「判断」などの言葉に統一性を欠き、調査対象者がこうした言葉に反応したことが想定される。また、この2下位因子は高校生には見られなかった(藤原・濱口, 2010a)。よって、人の話を聴く際にこうした客観的で判断を避けようとする聴き方は、青年期後期になって現れる特徴であると推測される。

信頼性・妥当性に関しては、「判断の遅延」下位因子について十分な α 係数が得られず、その後の分析に含めることを見合わせた。また一部2項目のみで構成された下位因子が存在し、下位因子内の網羅性には疑問が残される。今後は項目内容の見直しも含め、より頑健な尺度への改訂も検討すべき課題であろう。

しかしながら、近接する概念との関連を検討した結果、共感性や社会的自己制御、全般的社会的スキルとは一部で.50以上の相関係数を示しており、十分な妥当性を有しているといえる。一方知性との関連は比較的低く、聴くスキルが知的な側面から独立していることが実証された。これにより、聴くスキルの認知的側面が、改善可能な「スキル」であることが示されたといえよう。

b. 聴く行動スキル尺度について

本研究で作成された聴く行動スキル尺度には、予備調査から得られた8構成要素のうち、「意見」、「視線」、「話を遮らない」、「話の整理・質問」、「作業の中断」、「姿勢」の6つの構成要素が下位尺度として含まれた。一方で、天井項目の削除や因子分析の過程で「うなずき・あいづち」、「表情」の項目が因子として抽出されなかった。これらも聴く行動スキルの重要な要素ではあるが、全般的に平均値が高く、個人差を反映しないと考えられることから、尺度構成を見送った。また、今回の結果では、「姿勢」に高い負荷量を示すと想定していた因子が「前傾」と「寄りかからない」の2つに分離した。項目は逆転項目か否かによって分離しており、この2下位因子はほぼ無相関であった。こうした「表情」や「姿勢」などの側面は、会話の状況や文脈の中で常に変化する変数であると考えられる。例えば深刻な話題の時には、相手のほうに身を乗り出し、相手の顔を真剣に見ながら話を聴くことが想像できる。一方、日常会話では、椅子や壁に寄りかかり、よりリラックスしながら話を聴いていることが推測される。したがって、常に「姿勢」や「表情」が一定なのではなく、状況に応じて変化させたり、同じ話題の中でも変化をつけることが、よりスキルフルなのではないか。本研究の目的は全般的な聴くスキルを測定するための尺度作成であったため、回答者に場面を想定させていない。しかし、特にスキルの行動面を検討する際には、様々な対人関係や文脈に焦点を当てる必要がある(Wiemann & Backlund, 1980)ことから、今後はこうした文脈や場面に注目した検討もできよう。

とはいえ、聴く行動スキル尺度は尺度全体および各下位尺度の α 係数もおおむね十分な値であった。聴く認知スキル尺度同様、一部2項目のみで構成された下位因子が存在し、下位因子内の網羅性には疑問が残るが、他尺度との相関を検討した結果、共感性や全般的社会的スキルと正の相関を有していた。社会的自己制御尺度の「感情と欲求抑制」とは有意な相関が得られなかったが、これも会話の内容に左右されるものと考えられる。例えば、話し手に対して共感した場合は、その共感を抑制せずに表現した方が、よりスキルフルであろう。有意な相関係数が得られなかった背景には、聴き手が自身の感情を抑えるよりも、会話の際に聴き手が抱いた感情を話し手に表現する方が、対人場面においてより適切な場合があるためではないか。なお、知性との有意な相関が得られなかったのは、聴く認知スキル同様、スキルが知的側面と独立していることを示していると考えられる。

以上より、本研究で作成された聴くスキル尺度は、聴くスキルを先行研究の構成要素からとらえ直し、それらを反映した信頼性・妥当性を有する尺度として、研究上ならびに実践上非常に意義のある尺度である。

2. 聴くスキル尺度間の関連について

聴く認知スキル尺度と聴く行動スキル尺度の相関係数を概観すると、行動スキル全体は認知スキル全体ならびにすべての下位尺度との正の相関を有し、特に「会話への集中」や「共感」などとの相関係数が高かった。一方認知スキル全体は、ほぼ全ての行動スキル下位尺度と正の相関を有しており、特に「相手への応答」や「定位」との相関係数が高かった。一方、「寄りかからない」とは有意な相関が得られなかった。以上より、聴くスキルの認知面・行動面の両方に関連の深いスキルは、「会話への集中」や「共感」、「他者視点の考慮」、「相手への応答」や「定位」であると言える。つまり、認知的に相手の会話に耳を傾け、他者の視点に立って理解することが、相手へ応答したり体を向けるなどの行動と密接に結びついており、これらが聴くスキルの中心を成すスキルであると考えられる。

一方、「前傾」や「寄りかからない」などの姿勢の部分は、認知スキルとの関連がほとんど認められなかった。本研究では聴くスキルを使用する対象を友人に限定したものの、場面や話題については特に定めなかった。しかしながら、話を聴くときの姿勢は、さまざまな要因に応じて変化させることが望ましいと考えられる。例えば、Mehrabian (1969) では、体の前方への傾きが相手にポジティブな態度を伝える際の影響因として挙げられているが、和田 (1986) の実験では、前方への傾きがネガティブな影響を与えること、対人距離が遠い方が体の前方への傾きが大きいことを明らかにしている。このように話を聴く際の姿勢は、設定する話題や対人距離など、様々な要因が複合しており、単に認知スキルによって規定される行動とは一線を画していると考えられる。また他の行動要素についても、認知スキル以外の要因が規定していることも考えられ、今後の検討課題である。

3. 聴くスキル尺度の性差について

聴くスキル尺度について男女差を検討するために独立サンプルの *t* 検定を行った結果、両尺度全体と各下位尺度の一部において性差が認められ、いずれも女子の得点が男子に比べて有意に高かった。従来より、男子よりも女子の方が他者の表明を望む気

持ちが高いことが明らかになっているが (新見他, 2004; 柴橋, 2001), こうした気持ちが聴くスキルに対する意識を高め、スキルの獲得を促していると考えられる。また、こうした背景には、男子よりも女子の方が友人と付き合う際に自己開示し、積極的に相互理解する (落合・佐藤, 1996), 青年期特有の友人関係における性差が影響しているものと考えられる。社会的スキルの下位概念を精査し、発達の観点を導入することによって、SST におけるより効果的な介入を開発することに寄与すると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では、大学生を対象として、社会的スキルの中でも「基本中の基本」(相川, 2000) と言われている聴くスキルについて、先行研究の分類を踏襲し、信頼性と妥当性を備えた質問紙尺度を作成した。聴くスキルの認知的・行動的側面を別個に尺度化し、十分な信頼性と妥当性を有することを確認した。また、両尺度の関連を検討し、聴くスキルの中心を構成する認知的・行動的要素を明らかにしたほか、尺度全体と一部下位尺度に性差を確認した。こうした結果は、今後の SST などの実践に対してより有効な基礎資料として提供されうるものである。また、この尺度を足がかりに、聴くスキルと関連する適応感との関連など基礎研究の更なる進展も期待される。

一方で本研究では、質問紙のみのデータ収集に留まり、第三者評定や観察調査などの行動評定を含むことができなかった。本尺度の妥当性をより確固としたものにするためにも、今後はこうした測度を併用することが望まれる。また同様に、今回の尺度作成は一般的な聴くスキルについて回答を求めている。従来より、有能なコミュニケーションのためには、①基礎となる知識構造と、②文脈に依拠した具体的なスキルの両方が必要であると言われている (Wiemann & Backlund, 1980)。今回の行動スキルに関して、この後者についての検討が十分とはいえない。これらは今後の課題となろう。

引用文献

- 相川 充 (2000). 人づきあいの技術 サイエンス社
Brownell, J. (1985). A model for listening instruction: Management applications. *The Bulletin of Association for Business Communication*, 48(3), 39-44.

- Brownell, J. (2009). *Listening: Attitudes, principles, and skills*. 4th ed. Boston: Allyn & Bacon.
- 出口保行・斎藤耕二 (1991). 共感性の発達の研究 東京学芸大学紀要第一部門, **42**, 119-134.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453.
- 藤原健志・濱口佳和 (2010a). 高校生用聴くスキル尺度作成の試み (1) 日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集, 654.
- 藤原健志・濱口佳和 (2010b). 高校生の社会的スキルと親和動機及び学校生活満足感との関連—聴くスキルと主張スキルを中心に— 日本カウンセリング学会第 43 回大会発表論文集, 90.
- 後藤吉道・佐藤正二・佐藤容子 (2000). 児童に対する集団社会的スキル訓練 行動療法研究, **26**, 15-24.
- Gresham, F.M. (1986). Conceptual issues in the assessment of social competence in children. In P. Strain, M. Guralnick & H. Walker (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment and modification*. Academic Press, pp.143-179.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008). 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成—妥当性の検討および行動制御・行動接近システム・実行注意制御との関連 パーソナリティ研究, **17**, 82-94.
- 本田真大・大島由之・新井邦二郎 (2009). 不適応状態にある中学生に対する学級単位の集団社会的スキル訓練の効果 教育心理学研究, **57**, 336-348.
- 堀毛一也 (1990). 社会的スキルの習得 斎藤耕二・菊池章夫 (編著) 社会化の心理学ハンドブック—人間形成と社会と文化 川島書店 pp.79-100.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 厚生労働省 (2004). 若年者の就職能力に関する実態調査 厚生労働省 2004 年 1 月 19 日 (<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/dl/h0129-3a.pdf>) (2011 年 1 月 22 日)
- 久木山健一 (2006). 聴くスキル尺度の作成および対人関係との関連の検討 日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集, 29.
- Mehrabian, A. (1969). Some referents and measures of nonverbal behavior. *Behavior Research Methods and Instrumentation*, **1**, 203-207.
- 村上宣寛・村上千恵子 (1997). 主要 5 因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, **6**, 29-39.
- 日本経済団体連合会 (2010). 新卒 (2010 年 3 月卒業者) に関するアンケート調査結果 日本経済団体連合会 2010 年 4 月 14 日 (<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2010/030kekka.pdf>) (2011 年 3 月 2 日)
- 新見直子・松尾紗織・前田健一 (2004). 大学生の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 広島大学心理学研究, **4**, 139-149.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- Rhodes, S.C., Watson, K.W. & Baker, L.L. (1990). Listening assessment: Trends and influencing factors in 1980s. *International Journal of Listening*, **4**, 62-82.
- 柴橋祐子 (1998). 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究, **31**, 19-26.
- 柴橋祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, **12**, 123-134.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- 和田 実 (1986). 好意, 対人距離および話題が非言語的行動と自己開示に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **26**, 1-12.
- 渡部麻美 (2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題—4 要件の視点から— 教育心理学研究, **54**, 420-433.
- Watson, K.W., Baker, L.L. & Weaver, J.B. (1995). The listening styles profile (LSP-16): Development and validation of an instrument to assess four listening styles. *International Journal of Listening*, **9**, 1-13.
- Wiemann, J.M. & Backlund, P. (1980). Current theory and research in communicative competence. *Review of Educational Research*, **50**, 185-199.

(受稿 4 月 11 日：受理 5 月 11 日)